

春夏秋冬 台湾徒然

第40回

タイ山中の台湾村

柳本通彦

春節を前にした台北発中華航空機はほぼ満席。わずか4時間足らずでまだぴかぴかのチェンマイ空港に到着した。ホテルとのバックにしていたので、現地旅行社のガイドとおぼしき女性が出迎え、市内の寺院と博物館をまわってホテルまで送ってくれた。

彼女の名刺には中国語の名前が印刷されていたが、彫りの深い顔だちから、あるいはと尋ねてみると、やはり母親はアカ族、父親は雲南から逃げた元国民党兵士であるという。年は、三十代後半であろうか、なかなかの美人である。

半日いっしょにいて、彼女が繰り返して使った言葉がある。「回台湾^{フイックワン}」。考えてみればおかしい。彼女も彼女の両親も台湾とは縁もゆかりもない。なのに「台湾へ行く」ではなく「回(帰

る)」というのである。

これを理解するには、いろいろな予習が必要となるのであるが、この彼女の存在そのものから「不思議の島・台湾」のもう一つの不思議が浮かび上がってくるようだった。

国共内戦で敗北した中国国民党は1948〜49年に台湾に逃亡してきた。中華民国という国家体制もろとも百万の難民とともに台湾本島になだれ込んだのであるが、海を隔てている以上、当然取り残された軍隊がいた。

そのうち雲南の軍勢は南へ南へと逃げた。そして山脈と国境を越えて、タイ・ミャンマー・ラオスの山間部に入り込む。これら国民党の残党は、この一帯の少数民族の村に居座り、中国奪回のチャンスがうかがっていたのだが、世界情勢はそうには進まず、その



台湾人が出資して山中に建てた歴史博物館

まま60年の星霜を経たのである。

途中の経緯は端折るが、結果として、タイ北部国境の山岳民族と中国国民党兵士との間に多数の家族と子孫が生まれ、今日に至った。責任の一端は国民党にあるというわけで、「雲南国民党」の一行は次々に台湾に引き取られ、台湾に定住することとなる。

台湾は国民党の本拠地であり、国民党老兵の子弟であるこのガイドさんは台湾へ行くことを「台湾へ帰る」と表現しているのだが、実際彼女に北京語や福建語を教えたのも、台湾から派遣されてきた教師であったという。

彼女たちはどのようなところに生まれ育ったのか……、チェンマイから北へ車で約5時間も走るとミャンマー

との国境付近に達する。標高2000メートル近い高地に点々と集落が展開し、なかにはセブンイレブンがあるような開けた村もある。

明かに山岳民族と思しき人々が台湾訛りの中国語で声をかけ、台湾からきた商人が茶畑と工場を開き、台湾料理の食堂が看板を上げている。タイ山中にほつかりと「台湾」が居座っている格好である。

さらに奥地のまるで原始そのままの集落。その小さな小学校にも中国語の看板があり、黒板を見ると繁体字が残っていた。

かつては麻薬にも手を染めて生き残りを図っていたという兵隊とその子孫たちもいまは武器を捨て、畑を開き、烏龍茶をつくり、観光業に邁進しているという。

タイ北部国境、この民族のモザイクのような山々にも大国の歴史が影を落とし、戦争に翻弄された人々が逞しく生き抜いているのだ。

やなぎもと・みちひこ

京都生まれ。99年度「潮賞」ノンフィクション部門優秀賞受賞。著書に「台湾先住民・山の女たちの聖戦」(現代書館)「台湾革命」(集英社新書)「明治の冒険科学者たち」(新潮新書)など。最新刊に「ノンフィクションの現場を歩く 台湾原住民族と日本」(かわさき市民アカデミー出版部)